

新美南吉の詩集より

Nankichi×Step

南吉の詩は童話に勝るとも劣らず魅力的。
地元を中心に活躍する現代の若手作家たちと詩をコラボレーションしていきます。



小さな星

彼ハ小さな星です
片隅にまたたいています
太陽の雄弁もありません
月の叙情も持ちません
金星の魔術もありません
彼は小さな星です
花屋が落としていったカマキリの一本です
少女がすった燐寸の一本です
草の葉にかくれた子供の螢です
夜 それぞれの星が それぞれの
沈黙で歌うとき
遠い太古、深い森、
黒い海、大きな炎、
戦争やときめく心臓のことなど
歌うとき
彼は小さな星です
小さい蟲や小供のことを
うたいます
咳をしながらとぎれとぎれに
うたいます
風が吼える晩や
霧が湧く夜は
どっかへ隠れてしまします
月が照らす空や
窓の明るい街では
自分の火をふきけしてしまします
彼は小さな星です
梢の小枝にひっかかって
小さい眼をしばたっています。

ツメサキの世界

こも・紙もの作家
<http://tsumesaki.com>

04年「ツメサキの世界」ブランド立ち上げ
「伝える」「届ける」をテーマに紙雑貨・手彫りはんこなどでのひらにのちいさなものを制作。作品は全国の雑貨店にて販売中

絵について

南吉さんが、自らに重ね合わせたような詩に惹かれました。
しんと冷えた夜空に、
ささやかなひかりだけれど、決して消えることなく瞬き続ける、
ちいさな強さを描きたいと思いました。

新美南吉



にいみなんさち
(1913-1943)

大正2年7月30日、愛知県知多郡半田町(現・半田市)に生まれる。幼くして母を亡くし、養子に出されるなど寂しい子ども時代を送る。旧制半田中学校卒業後、「赤い鳥」入選を契機に北原白秋や巽聖歌の知遇を得る。昭和18年、結核のため29才で世を去る。

解説

「小さな星」に例えられた彼は、いかにもはかなく哀れな存在である。だが、一方でこの詩はとてつもなく大きな広がりや深みをもった作品のようにも思われる。その秘密の一つは、はかない「小さな星」と対比するように置かれた宇宙的な広がりをもった言葉によるものであり、もう一つは、原始的で混沌とした

世界を暗示するような言葉によるものだと思う。改めて読み直してみると、この詩の面白さは、悲しく滑稽なほどにはかない一個の「小さな星」が、それでもやはり太古からの歴史と時間の流れの中で宇宙的な存在として瞬いている、というほろ苦い感情を抱かせるところにあるのではないかと思う。

解説者

前新美南吉記念館館長

矢口 栄 さん

半田市、知多市、東浦町の小中学校勤務を経て04年から11年まで新美南吉記念館館長を務める。著書「南吉の詩が語る世界」(一粒社出版部)「子どもたちに贈りたい詩」(教育出版センター)「新しい詩の創作指導」(共著・明治図書)ほか。